

第三には、当時の家屋は隙間だらけで寒くそのための保温上の防寒的機能が上げられる。

第四には、現在でもソ連や東ヨーロッパで存続されているが、苦痛に晒して精神的耐性を練磨する鍛練的機能がある。ソ連ではコシンカと呼ばれ、エリクソンが、コシンカからの解放と関連づけてロシア人のパーソナリティを精神分析している。

第五には、現代小児医学においてスワドリングが再評価されている鎮静的機能の特記したい。特に小児看護医学では、スワドリングによる運動の抑制がむしろ乳幼児をおとなしくさせるのに効果があることが実証されている。

日本の小児科領域にみられる

プラグマティズムについて

広田暉子

小児科領域の歴史を調べてきて感じることは、プラグマティックな精神がどの時代にもみられることである。そもそもこのプラグマティズムとは一九世紀後半に米國に発祥した哲学で、(一)功利主義的、(二)実証主義的、(三)自然主義的、といった三つの傾向に沿って発達した(注一)。以下に、日本の小児科領域の歴史においてプラグマティズムの精神がどのようなところにみられるかを例をあげて示す。

(一) 構成生薬の数をめぐって

『医心方』に記載された処方はずべて中国の医書からの抜粋によるものだが、小児門(第二五卷)に記載された四六二処方中の三三九処方という多くの処方が単一の薬物から成っている(注二)。一〇以上の薬物から成っている処方一つもない。用いられた薬物も極めて入手しやすいものが多い。引用された中国の医書も、最も多いのが『産経』、次に『千金方』、『葛氏方』、『小品方』の順となっている。『外台秘要方』と比べても『医心方』では『葛氏方』が重視されているが、それは『葛氏方』が一般庶民の役に立つようにと入手容易なありふれた薬物を用いた処方を載せ、したがって単方が多く記載されているためと思われる。

『小品方』は一部を除いて現存していないので、『医心方』や『外台秘要方』に引用された処方でその内容を推測しなければならぬ。『外台秘要方』に引用された『小品方』の処方は二九七処方であり、そのうち一三六処方が単方であるが、『医心方』では三一五処方中の一九六処方が単方である。したがって『医心方』には『外台秘要方』よりも高い率で『小品方』から単方を引用しているといえる。『医心方』小児門では『小品方』からの引用は一八処方中の一三処方が単方であり、五つ以上の構成生薬から成る処方の引用は一つもない。

さらに、『千金方』や『外台秘要方』の小児門の処方でも単方の占める率よりも『医心方』小児門における単方の率のほうがずっと高い(注二)。

このように『医心方』、とくに小児門では簡単な処方が好まれる傾向にあるが、この傾向は現在までの日本の漢方医学において一貫してみられる傾向と思われる。

すなわち、『万安方』小児門でも単方の占める率は一一二一処方中の三六二処方であり、『医心方』よりは少ないが、原本である『幼々新書』と比べるとずっと構成生薬の数が少ない処方が多く、一〇以上の構成生薬で成り立っている処方は一〇処方にすぎない(注三)。

また、『万安方』小児門に引用された『千金方』や『外台秘要方』からの処方の単方の占める率のほうが、『千金方』や『外台秘要方』の小児門の処方の単方の率よりも高い。

江戸時代の医書の小児科領域における処方の構成生薬の数も一〇くらいまでのものが多い。

このように、日本では中国の医書を簡略化して実践に供しやすくするといった傾向が認められる。

(二) 『傷寒論』をめぐる

『傷寒論』処方は『活人書』などを介して『万安方』小児門にも一処方みられるが、当時の処方に単剤が多く外用や散剤が多かったのとちがって、単剤でなく外用でなく煎剤である。これら一処方以外にも欄外の注などをみると、著者が『傷寒論』処方を使いこなしていたと推測できる。『傷寒論』は五行などの難解な理論を含まない、明解に構成された医書で、プラグマティックな面を持つが、これがすでに『万安方』で重要視されているところに、将来の吉益東洞の出現を予感させるものがある。

注一 鶴見俊輔「アメリカ哲学」講談社学術文庫、東京、一九四一—一九九、一九八六年。

注二 安達原瞳子「日本における小児科領域についての一考察」日本医史学雑誌 二九卷三号、二九一—三〇三、一九八四年。

注三 安達原瞳子「『万安方』小児門について」日本医史学雑誌 二九卷四号、三五三—三六七、一九八三年。